
東方矛盾伝

カレンダー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方矛盾伝

【Nコード】

N8036P

【作者名】

カレンダー

【あらすじ】

なんやかんやで幻想郷に来てしまつて早一週間。

同じくなんやかんやで紅魔館の執事（という名の雑用係）になり、ほのぼのの幻想郷ライフを満喫して、完全で瀟洒なメイドと小さな異変を解決する…かも。

序章開始（前書き）

処女作です。

至らないところも多々あると思いますが、よろしく願います。

序章開始

これは飽くまで僕の個人的な見解に過ぎないのだが、生きるということとは即ち、適応することと同義だと僕は思う。

人間、というか現在生きてる生物たちがこの長い歴史のなかで生き抜く事が出来た一番の要因は環境に適応出来たからである。

適応力⇨生物としての強さと言っても過言ではない。

環境に適応して進化を遂げた種こそ繁栄し、適応出来なかった種は絶滅していく。

例をあげれば、ゴキブリさんとか人間が絶滅しても生きていそうだろうか？

アイツらの適応力ったら凄いな。

ちなみに、最後に生き残った生物が最強という僕の超個人的な理論からすれば、地球最強の生物はプランクトンという結論になるのだが——いかに、話がずれ過ぎた。まあこれらの戯言を通しての結論は、新たな環境に適応することは生物が生き抜くために必要不可欠、ということだ。

幻想郷に来て今日で七日目、紅魔館に居候してから五日目の朝をようやく迎えようとしていた。

今まで見ていた夢にサヨナラバイバイして、これからの現実にはコンニチハしながら、僕はぼんやりと目を覚ました。

部屋を見渡すと、殆んど陽光が差し込まないので（吸血鬼の館だから当たり前だが）部屋の中は随分と薄暗い。

寝ぼけながらもカーテンを開けると部屋に光が差し込み、部屋が明るくなる。

そうして頭の中のスイッチをオフからオンに切り替える。

「よっこいしようにちっ」

呟いて、勢いよく体を起こす。親父臭いのは仕様だ。

適当に柔軟をして、仕事に向かうため部屋を出た。

仕事とは五日前から住んでいる紅魔館での執事。

まあ平たく言えば雑用係だ。

主な仕事内容はメイド長である十六夜咲夜のサポートである。

ちなみに僕の服装は燕尾服なんて堅苦しいものではなく、ジーパンにパーカーという非常にラフな格好だ。理由はこの服装が一番動きやすいというのと、今のところこのタイプ以外の服を持っていないからだ。

高級そうな、というか間違いなく高級な毛足の長い真っ赤な絨毯の

上を歩くこと数分、目的地である厨房へとたどり着いた。

「おはよう」

僕の気配を感じ取ったのかこちらが声をかける前に挨拶をされてしまった。それに答える形でこちらから挨拶をする。

「ああ。おはよう、咲夜」

この朝のやり取りが幻想郷に来てからの朝の日課になりつつある。

それだけ僕が幻想郷での生活に慣れてきたということだろうか。

「貴方の今日の仕事なのだけれども」

挨拶をして、いつもの下らない雑談（内容は後で語るとする）を一通り済ました後、咲夜はそう切り出した。

「何だよ？掃除でも洗濯でも何でもやるぜ？」

住まわせてもらってるのだから当然だ。

「いえ、今日はちょっと人里に行って食料を調達してきてもらいたいよ」

「人里…」

それは好都合かもしれないな、僕個人としても人里には少々興味

と大々の用事がある。と、いうわけで。

「任せろ」

速答で即答である。

そんなわけで、今僕は咲夜から渡された買い物メモを握りしめ、人里にいる。

個人的な用事は当然後回しにして、まずは与えられた任務を完遂する。

買い物メモを確認して、僕はまず野菜を買うために店へと歩きだした。

しかし。

男ひとりの買い物風景を描写などしても仕方がないので、ここで朝の雑談内容を話して、僕の買い物描写をカットしたいと思う。

以下雑談

「ところでお前の能力って便利だよな」

咲夜の能力である『時を操る程度の能力』

「そうかしら？まあ確かに便利ではあるけど…」

私よりチートな能力を持つ人なんて沢山いるわ。それこそ八雲紫とか。と、咲夜は言う。

「いや、アレは確かに便利でチートな能力だけど…」
それでも。

「スキマ妖怪みたいな歩くチートはおいといて、戦闘においても、日常生活においてもお前の能力は屈指の汎用性を持つてると思うぜ」
時を操るなんて現世のアニメや漫画でいえばラスボス級的能力だぜ？

あのD I O様のスタンドと同じ能力なんだ、弱いわけがない。

「少なくとも貴方の能力よりは汎用性があることは認めるわ」

「……嫌味か？」

「残念、皮肉よ」

「一緒だよ、そんなもん！」

まあ確かに僕の能力は欠陥品だし、融通が利かないけどな！

それこそ、僕の能力は致命的な『矛盾』を孕んでいるのだ。

ともあれ。

咲夜の能力は大変便利で、僕は単純にその能力が羨ましいのだ。

ザ・ワールドって言ってみたいのだ。

「言えばいいじゃない」

「心を読むなよ…」

「声に出てたわ」

「声を聞くなよ…」

「無茶を言わないで頂戴」

「ザ・ワールドォ！」

「結局言うのね…」

以上朝の雑談終わり。

回想描写を挟み、買い物は無事に終わった。次は個人的な用事を済ますとしよう。

個人的な用事——

それは僕の命の恩人を訪ねることだ。

幻想郷に来て紅魔館に拾われるまでの地獄のような二日間。

何の知識も力もない人間が生き抜ける筈もなく。

彼女が通りかかってくれなければ僕は多分、いや間違いなく、殺さ

れていただろう。彼女は僕の命を救い、幻想郷で生き抜くための最低限の知識を与えてくれた。僕に備わっている能力についての説明も彼女に教わった。

そんな僕にとっての恩人である彼女が住んでいるであろう人里外れの小さな小屋の前まで僕は来ていた。

古びた木の扉の前に立ち、一応ノックをする。

……返事はなし。

と、いうわけで。

勝手に上がらせてもらう。

礼儀知らずと思わないで欲しい。

この小屋の主はノックに応じる人では決してないのだ。

小屋の中に入ると、小屋の外見とは裏腹に豪華な内装が視界に広がる。

その部屋の真ん中にあるソファーにどっかりと座っている女性。

肩まで届く長さの髪は真紅に染まっており、モデルか何かと思うくらいにプロポーションがよく、背も高い。間違いなくそれは美人と表せる風貌。だが何よりも異様なのは彼女が来ている服装だ。

「土産の酒はあるかな？ 少年」

そう言っ て紅と黒という異様な色の巫女服を着た彼女は、こちらにシニカルな笑みを向けた。

「あの時はありがとうございました――零無さん」

僕はおつかいの時に買ったお酒を出しながらそう言っ た。

「気にすんなよ、お前はあそこで死ぬようなタマじゃない。私が助けなくとも他の誰かが助けていたさ。まあ今回は偶然、その役目が私だったというだけさ」

それに旨そうな酒も貰ったからそれでチャラだ、と彼女は言いながら今度は豪快に笑った。

彼女の名は博麗零無

先代の博麗の巫女――らしい。

博麗霊夢を異変解決の専門家、トランプにおけるエースとするなら、博麗零無も同じく異変解決の専門家、しかしトランプにおいて彼女を指すカードはジョーカーに他ならない。

エースは切り札であり、ジョーカーは万能札。

つまり何が言いたいのかといえば、単純に博麗零無は博麗霊夢を全てにおいて上回っている――らしい。

力も知識も経験も。

もつと言えば。

この幻想郷において現時点で博麗零無に勝てる者はいない、そう断言できる——らしい。

何故僕が彼女の説明の語尾に『らしい』などつけているかというと、これらの説明は全て彼女——博麗零無の受け売りだからだ。

つまり、全て彼女の『自称』なのだ。

彼女が本当に博麗霊夢よりも強いのか、僕にはわからない。ただひとつ、彼女の力を直に目の当たりした僕が断言出来るのは、彼女は強い。相対的では無く、絶対的に強いということだ。

「私がジョーカーだとすると少年はスペードの3かな？」

「いきなり大富豪の話ですか……」

大富豪においてジョーカーに勝てる唯一のカード。

しかし大富豪という遊びにはローカルルールがありすぎて色々曖昧なのでスペードの3が本当にジョーカーに勝てるのか微妙な所ではあるが。

「僕はそんなに素敵な代物じゃないですよ、ただの欠陥品です」

咲夜のお墨付きだ。

「私からすれば誰も来れない筈の私の小屋に来て、誰も見えない筈の私を見て、誰も聴こえない筈の私の声が聴こえるその能力は誇ってもいいと思うがね」

この小屋の周囲には博麗大結界を応用した認識阻害結界を張っているらしい。そして彼女自身も本来人間や妖怪には認識出来ない——らしい。

この欠陥能力は本来認識出来ないモノを認識することが出来る——らしい。

しかしやはり。

この不安定で不確定な能力は使用者の僕からしてみれば欠陥品なのだ。

「少年、君も飲め」

そんな言葉を皮切りに、僕と零無さんの真っ昼間の宴会は半ば強制的に零無さんによって開始された。幻想郷では『未成年だから』という理由では飲酒を辞退することはどうやら出来ないらしい、ここは潔く諦めるとしよう。とはいえ、まだ一応仕事なので長居は出来ない。と釘は刺しておいた。

「ところでさあ…」

宴会を開始してしばらくたった頃。突然、唐突にこう切り出された。その時には僕が持ってきたお酒の残量はすでに瓶の3分の1を切っていたように思う。

今までしてきた益体もない雑談（主に大富豪のローカルルールについて語り合っていた）とは違い、その言葉には妙に重みがあった。

「少年の人生は幸せか？」

実に難しい質問である。

実に実に。

不幸でないのならば、それは幸せなのか。
幸せでないのならば、それは不幸なのか。

自分が幸福なのか不幸なのか。

それは自身の個人的な判断委ねなければならない実に曖昧な境界線なのではなからうか。無論絶対的な評価とすれば幸福と不幸の間には明確な区分があるのだが。

幸福を感じることが出来るのは不幸を感じたことのある人だけだし、逆に不幸を感じることが出来るのは幸福を感じたことのある人だけだ。毎日5万円貰える人はお年玉で5万円貰っても幸せとは感じないだろう？

つまりそういうことだ。

そんな答えもない不毛な考察はさておき。

僕はその深そうな質問に極めて普通で平凡な解答を答えた。

「普通：ですかね」

今まで生きてきて幸福なこともあったし、不幸なこともあった、だからプラスマイナス0でとんとん。

大体人生なんてそんなものじゃなかろうか。

「そうかい」

そう言って彼女はシニカルに笑った。

「そいつは上々だよ、少年。普通の人生ってのは最高に素晴らしいものさ」

そうして彼女はまたグイッと酒を煽った。

ともあれ。

どうやら酒のはいった人間同士の雑談というのはどうにも描写しきれるものではないらしい。

いつもの雑談以上にそこには意義もなく、意味もなく意思もなく、オチもなかった。

そんな無意味で無意義で無意思な骨のない魚みたいな会話が、そんな戯言の応酬が。

僕はどうしようもなく楽しかったらしい。

だから。

僕は完全に失念していた。

今がおつかいの途中で。

時計の短針は既に夜の7時を指していたことを。

序章終了

わかっていたはずだ。

常識のはずだ。

幻想郷の夜道は現世とは段違いに危険ということなんて。

幻想郷に来た時にも痛感したはずなのに。

僕はどうかやら学習能力すら欠陥品らしい。

「ふむ。そろそろ帰らなくていいのかな、少年？もうとっくに夜と言っても過言ではない時間なのだが」

その零無さんの言葉が昼間から続いた大宴会の最後を飾った言葉だった。

「説教確定かな、これは」

小屋を出て数分。必死に紅魔館への帰り道を走りながら僕はそう呟いた。

そう。

何事もなく紅魔館に帰って咲夜のキツイお仕置きを受けるというオチは、今日の最高のハッピーエンドだったのだろう。

だけど、感じてしまった。感じてしまったのだ。

一度知覚してしまえばもう無視することすらできない、そして意識するまでもない、強烈で、圧倒的で、そして殺人的な——殺意。

悪意なんて微塵もなく。

敵意なんて欠片もなく。

害意なんて断片もない。

そんな混じりけなし純度100%の明確すぎる殺意。

粘りつくように全身にまとわりついてくる嫌な気配。

この気配もあの殺意も感じたことがある。幻想郷に来て間もなく、何の知識も力もない頃に。だから間違えるわけがない。

走る。

しかし気配はついてくる。
逃げる。

しかし気配はついてくる。

これは―――。

「…まいったな」

これは…確実に逃げ切れない。

逃げ切れない。

死にたくない。

なら。

「戦うしか…ないよな」

武器は欠陥能力と咲夜からもらったナイフ一本のみ。

「…ふう」

覚悟を決めて足を止め、懷からナイフを出し、そして振り向く。

そこにいるのは殺意の根源にして気配の正体。

「来いよ、《人喰い》」

そこにいるのは理性のある妖怪などではない。

多分、僕が六日前に遭遇した異形と同類。

野生の象徴、本能の塊、欲望の権化である異形の獣。

その異形からジリジリと距離を取り、まずは相手の出方を見る。

今から始まる戦闘にはスペルカードルールなんて規則は存在しない。

奪うか与えるか。

そういう、殺し合い。

故に、僕はこの異形から奪うとしよう。

生きて帰って、買った食物を渡して、咲夜のお仕置きを受けるために。

異形について具体的に描写するなら、真っ黒い毛むくじやらの獣、つまり黒毛の大猿と描写とするのが正しいように思う。

そして、大猿は、僕に向かって、跳んできた。

黒毛の腕から繰り出される一撃。

それは僕の筋力で受け止められる威力でも、反射神経だけでかわせるような速度でもなかったが——しかし、大猿の動きはまるっきりの直線的な動きだったため、動きを先読みでき、すれすれで避けられた——避けた大猿の一撃は、当然のように僕の後ろの太木を微塵に砕いた。

その悪質な冗談みたいな破壊力に驚愕する。

しかし。

退くわけにはいかない。

というか、この大猿相手に背を向けるということは自殺行為に他ならない。

なら。

僕がとれる行動は一つ。

攻撃あるのみ。手に握ったナイフを振りかぶり、無駄な動作を一切破棄し、相手を殺すことだけに特化した一撃を放つ。

僕のナイフ捌きは全て咲夜からの教えだ。

しかし、咲夜のナイフ捌きと比べれば、僕のは完全な劣化コピー。

それでも。

致命傷を狙えば、ダメージを与えることができるはずだ。

狙った先は首。

だが僕の放った渾身の一撃は大猿の圧倒的な反射と速度によって避けられてしまった。

故に。

「まずは、一撃」

——僕の一撃を避けた大猿の首からは血が吹き出していた。

能力を使用したからには、僕の能力のことを、そろそろ語らなくてはならないだろう。

どうしようもなく欠陥品で矛盾したこの能力を。

『矛盾を起こす程度の能力』

それが、僕的能力——らしい。

具体的に言うなら、さっきの現象。
ずの一撃が当たる』

《避けたは

こういう矛盾した現象を起こすことが出来る

——らしい。

これだけ書くとそこそ良い能力に見えるがちなのだが、しかし。

この能力を付加したナイフで相手を斬りつけて、その一撃が当たった場合。

《当たったはずの一撃が外れる》

つまり相手は無傷というデメリットな現象を起こすのである。ちなみに僕は能力を付加したナイフと付加していない普通のナイフの二本を使い分けることで、ナイフを用いた戦闘に関しては、この弱点を一応カバーしている。

まあこの弱点だけでは欠陥品とは言えない。

この能力が欠陥品と呼ばれる2つの所以、それは——

《発動したはずの能力が発動しない》

この現象を低確率ではあるが、引き起こす——らしい。正確にはこの現象を起こした時点で能力自体は発動したらしいのだが。

そしてもう1つ。

この能力にはナイフ以外には適応されないという制約がある——らしい。

これは能力としては致命的な欠陥だ。

故に欠陥能力。

以上能力説明終了。

とりあえず大猿相手に一撃入れたものの、致命傷には至らなかったらしい。

「こいつは骨が折れるな…」

比喻じゃなく、本当に、この大猿との殺し合いで何本僕の骨が折れることか…。

そんな下らないことを考えている内に。

大猿の右拳。

それが、骨をゴキゴキと鳴らしながら伸びる大猿の腕とともに、迫る。

比喻じゃない、本当に腕が伸びているのだ。回避を許さない速度で。

そんなトリッキーな一撃が先読みできるわけもなく。

一応致命傷は避けたが、脇腹に戦車の如き一撃を受ける。

「――ッ！」

声も出ない。

吹っ飛ばされ、大地を転がされ、大樹に叩きつけられる。

脇腹は当然何本かイッてるだろうし、呼吸もままならない。

しかし即座に立ちあがり、無様に転がる。

追撃が迫ってきたからである。大猿は腕を伸ばすことなく、堂々と右拳を振り抜く。その右拳は、またも大樹を微塵に砕く。だが、大猿が砕いた大樹の樹の欠片が偶然大猿の目に入る。当然大猿は困惑し、隙が出来る。

そこに痛む体に鞭を打ち、体を走らせ、能力付加無し of ナイフで斬りかかる。

銀色のナイフが煌めき、大猿の目を傷つけるが、お返しとばかりに腹を強打され、吹っ飛ばされる。

そしてまたも大猿の追撃。

しかし。

大猿の追撃は空から降り注ぐ無数のナイフで背後を襲われ、強制停止。その隙を逃さず、大猿の首本にナイフを穿つ。それで決着だ。

大猿は血を撒き散らしながら倒れ、僕も体の限界で倒れる。

そして寝転びながら思考する。

空から降注がれた、ナイフ群。あの芸術技は、僕の劣化コピーとは明らかに違う、あのナイフ捌きが出来るのは――。

「貴方はおつかいすら満足に出来ないのかしら？」

十六夜咲夜をおいて、他にいないじゃないか。

「スイマセンデシタ」

「まあ、生きていて何よりよ」

「ああ、お陰様でな」

「でも、何かしらの罰を受けてもらうわ。明日、ね」

「……………おう」

明日のことを考えながら、僕は暫く、大地に倒れ伏せていた。

ヴァンプれぷりか 其の壱

偽物が本物に勝てないという道理はないと言うが、しかし、本物が偽物に劣ると言う道理など、それこそどこにもないのだ。

優れているが故に本物、劣っているが故に偽物。
だからやはり、アイツ

は偽物なのだろう。

から今日で三日目。

あの大猿との殺し合い

昨日は咲夜からの罰で一日メイド服で過ごすという、悪夢のような一日だった。当然メイド服で外出など出来るはずもなく、紅魔館にこもって雑務。

一昨日は、保護者（咲夜）同伴で永遠亭に向かい、怪我の処置をしてもらった。その際に永琳さんに、「貴方はよく死にかけるのですね」と笑顔で言われたのは良い思い出だ。

そして迎える今日、三日目の朝。

「さすがに情けなさ過ぎるだろう、僕」

幻想郷に来てから今までのことを思い返せば、色々な人に助けられてばかりじゃないか。その上メイド服って、男なのにメイド服って。

「別に幻想郷に来るまでが特別遅しかったわけではないけどさ」そう独り言を呟きながら、相変わらずの高級絨毯の上を歩く。

目的地は厨房：ではなく、今回は図書館だ。

僕の今の戦闘能力ではこの幻想郷で生き抜くのは、かなり難しい、というか無理だ。

という訳で、少し戦闘能力を伸ばす必要があるのだ。いや、魔王を倒すとか言うわけではないので、自らの身を守る程度で良いのだし、第一、基本ほのぼのであるはずのこの小説は戦闘がメインじゃないのだが。

それでもまあ備えあれば憂い無しということで、急場で戦闘能力を伸ばすには、『矛盾を起こす程度の能力』の応用方法を考えるのが一番効率が良いと考え、知識を求め図書館に向かっているのである。そんな理由を読者に説明しながら歩いていると、前方に見覚えのあるメイド服。

「貴方が図書館を訪ねるなんて、珍しいこともあるものね、皇祇君」

「いや、ちよいと調べものを…ってサラッと僕の名前初登場してる！？」

ちなみに名前の読みはスメラギだ。

ともあれ。

図書館に到着する前に、メイド長に遭遇するというイベントが発生した。

ヴァンプれぷりか 其の弐

「貴方の能力の応用方法ねえ……無いんじゃない？」

場所は図書館。館長？であるパチュリーに一応の許可を取り、適当にそれっぽい本を眺めている。ちなみに図書館前で遭遇した咲夜には、現在応用方法探しを手伝ってもらっている。

「いや無いことは無いだろ、何かしらの応用方法があるはずだぜ？多分」

自分で多分とつけてしまった……。応用方法がある、と断言出来ない自分の能力が憎いぜ。

「いや、だって貴方の能力って確か、基本的にナイフにしか直接能力を適用することが出来ないのでしょうか？その制約せいで応用の幅が極端に狭くなってるじゃない」

「まあな」

「何でそこで誇らしげな顔をするのかしら……無性に腹が立つからそのどや顔をやめて頂戴」

確かに咲夜の言う通り、僕はナイフにしか能力を適応出来ない。

「たとえば応用の幅が超狭いとしても、その中から冴えた方法を見い出せなければ、僕はあの大猿のような人喰い妖怪に襲われて死んでしまうかもしれない。そんな死に様は勘弁だ。この幻想郷ライフを満喫するためにも、僕はそれなりの力を身に付けなきゃならないん

だよ、咲夜」

「あら、私としては別に死んでもらって構わないのだけれど」

「お前が構わなくても僕が構うんだよ！」

「冗談よ、私としても貴重な雑用が居なくなるのはちょっとしたデメリットだもの」

「僕はお前の中での僕の扱いの小ささに驚きだよ…」

酷い言われようだと思う。しかし、その扱いの小ささも冗談だと、きつと冗談だと、僕は信じたい。いや、信じさせて下さい。

「話が変わるけどお前、僕の下らない用事に付き合っていて良いのかよ、メイド長は忙しいはずだろう？」

いくら僕が少し仕事手伝っているからといっても、咲夜の仕事量は相変わらず大変なものだし、この館の主人であるレミリア・スカレットの身边のお世話は咲夜にしか出来ないはずだ。

「それでも皇祇君のお陰でかなり楽になったのよ？」

まあ今回はそれとは直接関係のない理由なのだけど…」

「何だよ？理由って。気になるじゃないか」

咲夜が完全にフリーなるほどの理由って…。

「…………お嬢様が居なくなったのよ」

「はあ!？」

単純に驚愕だった。

無論レミリアが居なくなったことについてではない。あの咲夜が、居なくなったレミリアを探さず、こんな所でのんびりしていることについてである。

「いや、それこそこんな所でのんびりしている場合じゃないんじゃないか？」

「本来なら探すべきなんだけど……、今回は置き手紙があったのよ。明日の朝には帰るから探すな、とね。だから別にここで貴方の用事に付き合っても特に問題は無いわ」

「…まあ、お前が問題無しって言うならそれで僕は構わないんだが」
それにしてもレミリアお嬢様はどこに、何の用があったのかね…。

それは、今考えても仕方がないことなので、すぐに思考を止め、本来の目的である能力の応用方法を探すために視線を本へと戻した。

※修正のお知らせ

最初に書いた文章があまりにも酷かったため（今も酷いですが）、一話から四話を加筆・修正をしました。

また大きな変更点として、主人公の能力の制約を『刃物以外には能力が適応しない』というものに変更しました。その関係で戦闘シーンの展開も少々変更しました。

ですが、この変更によってストーリーが変わることはありません。

作者の未熟でこのような勝手な修正、変更をして本当に申し訳ありません。これからはこのようなことが起こらぬよう、精一杯頑張りますので、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8036p/>

東方矛盾伝

2011年8月21日10時31分発行